

収支報告

収入		
賛助会	233 口	2,625,000
支出		
研修・研究費		556,202
環境設備費		631,595
消耗品費		645,611
食材費		310,985
広告通信費		327,500
建築費補填・運営費		153,107
合計		2,625,000



会員募集

愛知国際病院ホスピスでは、賛助会員を募集しています。アメニティの充実（設備環境、造園、園芸）、ホスピスでの諸行事、ホスピス相談の充実、広報啓蒙活動、家族会の開催、ボランティアの活動、教育活動のために是非ご協力をお願いいたします。（ご入会いただいた方には年4回発行の病院だより「みなみやま」と年1回の本誌をお送りいたします。）

入会方法 下記の口座に会費をお振り込み下さい。

郵便振替口座 00890-5-3757 口座名義 愛知国際病院ホスピス賛助会

一口1000円（おいくらでも結構ですが、できましたら5口以上でお願いいたします）

明日葉の会 へのお誘い

明日葉の会は、愛知国際病院ホスピスで大切な家族の看取りを経験した方々が集まり、思いを声に出し、分かち合う会です。「明日葉」という植物は、今日摘んだ芽が明日には伸びてくるというほどの生命力の強い植物で、それにあやかり会の名前としました。家族を看取られてから半年以上を過ぎた方を対象として、偶数月の第3土曜日午前2時から4時、病院の一室をお借りして例会を行っています。続けてこられる方も、しばらく間を空けてこられる方もおられます。ご都合のつく時にご自由にご参加ください。

詳しくは、下記までお問い合わせください。

お問い合わせ先：愛知国際病院ホスピス 電話 (0561)73-3191（直通）（担当）中井

編集後記

暑い毎日が続いています。先日ホスピスでは夏祭りが開催され小さな縁日、花火大会が行われました。楽しい時間、思い出の時間となっていただけたら嬉しいです。今年から年1回の発行となりましたホスピスだよりです。川原先生から学んだこと、ご家族からのお話に感謝しながら頑張っていきたいと思います。今後もよろしくお願いたします。

（ホスピス師長・緩和ケア認定看護師 成田昌代）

戦後70年の夏を迎えました。川原先生をふくめベッドサイドで戦争体験を語って下さる方が、年々少なくなります。そのことを心に留め、ますます平和を守っていく大切さを感じずにはいられません。

（チャプレン 中井珠恵）



ホスピスだより

2015

〒470-0111 愛知県日進市米野木町南山 987-31
電話 代 表 (0561)73-7721
ホスピス (0561)73-3191



題 字

川原啓美

川原啓美先生をお見送りして

淀川キリスト教病院 理事長

柏木 哲夫

川原先生のご召天に際し、前夜式に出させていただきます。先生との長いお交わりのことに思いを馳せました。キリスト教医科連盟を通してのお交わりが主なものでしたが、愛知国際病院がホスピスケアに取り組まれるに際し、いろいろなことを話し合う機会があったことを懐かしく思い出しました。前夜式の時にいただいたご高著『分かち合いの人生』にもう一度目を通して感じたことは先生が信仰を土台とした優しさと強さを兼ね備えた実行の人であったということです。誰もが癒され、安心できる、あの川原スマイルは先生の優しさから出てきたものと思います。愛知国際病院やAHIの設立には、物事を推し進める先生の強さが必要であったと思います。優しさと強さをバランスよく兼ね備えた医者はそれほど多くありません。

先生の歩まれた道を少し離れたところから見せていただいていた私は、先生と奥様が文字通り二人三脚で医療と介護、福祉の道を歩まれたと思います。それだけに奥様のご召天は先生にとってとても大きい痛手であり悲しみであったと思います。仕事の面だけでなく、人生のパートナーとの別れはどれほどつらく悲しいことでしょう。奥様の告別式の時の先生の淋しそうな顔が目に焼き付いています。

しかし、お強い先生は奥様の先のご召天後もきっちりお仕事をなされて来られました。そして、文字通り、この世での使命を果たされ、天に凱旋されました。先生が残された多くの足跡を大事にし、さらに新しい主にある挑戦を続けることが、先生に多くのことを教えていただいた後輩としてのつとめであると思っています。

ご遺族の皆様と、愛知国際病院に関わっておられる方々に、先生からの豊かなお慰めがあるようにお祈りいたします。



新任のごあいさつ

ボランティアコーディネーター ^{ひがし} 東 のぞみ

この度、高田清子さんの後任として、ボランティアコーディネーターを務めさせて頂くこととなりました、東のぞみと申します。ホスピスボランティアの経験ありませんし、病院での勤務も初めてです。また愛知県での生活も初めて、と初めてづくしですから、何もかも手探りですが、早くホスピスのチームの一員として、お役に立てるよう努めたいと思います。皆様どうぞよろしく願いいたします。

最初にうかがった時、柔らかい雰囲気のお庭や、かわいい手作りの小物、さりげなく飾られたお花がとても印象的でした。ホスピスが多くの方に愛され、手間を惜しまず、スタッフやボランティアの方が協力してこの空間を作っておられると感じました。そして、4月のボランティア全体会に出席した時、勤務初日でとても緊張しましたが、講演で井手先生や成田師長のお話をうかがううちに、だんだん安心感がわいてきて、気づくと涙が溢れていました。私

自身、子育てをする中で、病院には幾度となくお世話になってきましたが、身近でありながら、いつもどこか遠い存在という印象がありました。ところが先生方のお話からは、最も弱い立場にある患者さんが、この病院では尊い存在として大切に受け入れられていると感じ、本当に素晴らしい方々に出会うことができたのだと改めて知りました。しかも、ここでスタッフの一員として働かせていただけることが誇らしく、いま感謝の日々を送っています。

「紫苑」の活動が、もうすぐ20年目を迎える中、事務室に収められた記録などを目にして、これまでその歩みに連なってこられた方々の願いや祈り、想いを感じています。これからも、入院されている患者さんが安心と信頼の中で日々を送られるように、ボランティアやスタッフの方々に学びつつ、共に歩ませていただきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

抱負

看護師 糸 永 文

ました。その時に初めて、そのご家族が不安や孤独感、何もしてあげられない思いを抱えて耐えていらっしやっただことを知りました。

また、もう声を出す力も、ペンを持つ力もなくなっているのに、家族へ思いを伝えようと必死にペンを握ろうとする患者さんがみえました。その力ない手を支えながら、何を伝えたいのか確認しようとしたが結局何も書くことはできませんでした。その手を支えながら、もっと早い段階で私にはできることがあったのではないかと胸が痛くなりました。様々な患者さんやご家族との出会

いの中で、辛い症状を和らげることの大切さと、患者さんやご家族が抱えてる思いや苦痛を知り、寄り添う看護の大切さを感じるようになり、ホスピスで働きたいと思うようになりました。

ホスピスで働き始め、その仕事の大変さを実感しています。ホスピスをご自宅のように感じていただきながら「今の大切な時間を穏やかに過ごしていただくために、患者さんやご家族を支えていくことができる看護師になる」ことを目標に励んでいきたいと思ひます。

退職にあたって

ボランティアコーディネーター 高田 清子

毎朝出勤していちばんの楽しみは、ボランティアルームの窓のカーテンを開けることです。ホスピス1階にあるボランティアルームからはホスピス裏手の樹木が間近に見え、時にはジョウビタキなどきれいな珍しい野鳥がやってくることもあります。山桜の大木やご遺族が寄贈して下さった梅や桜、柿の木などが目を楽ませてくださいますが、その中でも私は白モクレンの樹が大好きです。すべてが眠っているかのような冬の間もゆっくりゆっくりつぼみを膨らませ、3月中旬頃になると、つぼみの先に白い帽子のようなトンガリが顔を出して、いよいよ春がやってきたことを告げてくれます。そして、それが合図のように桜やレンギョウ、ユキヤナギなどが一斉に咲き始めるのです。今はもう数えられないくらいにつぼみを付けるほど大きくなりましたが、13年前、初めて窓から見た時は、4~5個のつぼみをやっと付けるほどの若木だったように記憶しています。

「この仕事は雑用です。でも、その雑用の中から光るものを見つけていけるかどうかです」という先輩ボランティアコーディネーターの信念。電話口で「『今日辛いことがあっても1週間よ、1週間たてば変わるのよ』と自分自身に言い聞かせていた」。こちらも別の先輩のつぶやき。「『神いやし、われら仕える』この言葉に出会えてよかった」というボランティアの方の一言。「『紫苑』の活動が始まった頃のボランティアの皆さんのころざしが、今も変わらず流れているの

を感じていますよ」という川原先生の言葉。

13年の間には、いろいろなことがありましたが、くじけそうになると不思議にこのような励ましの言葉が与えられ、今日まで歩いてくることができました。

ここでの仕事を通して、日々の暮らしを愛すること、そして生かされていることの不思議を教えていただきました。モクレンの樹ほどではありませんが、少しは成長したのかなと思っています。共に歩いて下さったボランティアの皆さん、スタッフ、そしてボランティア活動を快く受け入れて下さった患者さんご家族にここから感謝申し上げます。



ホスピスナースとしての

これまでは内科病棟で勤めていました。治療やりハビリを進める中で回復し、退院される患者さんもいましたが、中には積極的治療が望めず、苦痛を和らげる治療を選択される患者さんもおられました。あるご家族は毎日面会にみえ、徐々に弱っていく患者さんを不安げな表情で遠くから見守り、何も言わずに帰って行かれます。私はとても気になり、そのご家族を見かけたら声をかけ、短い時間ではありますがお話をするようにしていました。その後、その患者さんが退院となった時、そのご家族は私の手を握って、「話を聞いてくれてありがとう。一生忘れません。」と涙を流され

最後のメッセージ

愛泉会理事長 井手 宏

「先生につくられた愛知国際病院にいますよ」。夢の中でまどろんでいた先生にそう伝えようと、いつものように穏やかな笑みを浮かべ安心した顔をされました。5月22日、私たちのホスピスで、創設者川原啓美が天に召されました。後2ヶ月で87歳になるころでした。主治医としてだけでなく、家族としても見送りました。

川原啓美医師との最初の出会いは、1977年、大学1年生の時に川原医師の娘の同級生の一人としてでした。何となくお互いに緊張感(?)の漂う出会いでした。暁子先生がその場を和ませてくれていたことを思い出します。数年後、キリスト教医科連盟学生会で薬草園作りのためにはじめて愛知国際病院を訪れた時には、まさか自分がここで働くことになるとは想像もありませんでした。後に妻となった初穂の父親として先に出会い、医師としての川原啓美に出会うのは、かなり後の1989年のことでした。

一緒に働いて驚いたのは、その決断の早さと行動力でした。救急をやっていた外科医とはこういう風なのかと感動する場面はたくさんありました。学ぶことがたくさんあり、臨床医としての私の好奇心を満たしてくれました。夜中に緊急手術を一緒にしたことは今でも忘れられない思い出です。そのようなバリバリの外科医が、アジアの人たちの健康を守る時には、公衆衛生の見地に立ち、また、ホスピスをつくると決めた時には、緩和ケア医の立場に立っていました。場面場面で、頭を切り替え、その時に必要

なニーズに対応できる柔軟さにはいつも感動させられました。

「人は、何時でも、どんなときでも成長し続けられるのですよ」といつも前向きで、良いことを探し続ける姿勢は、ヘルパーの助けを借りながら自宅にいる時も、ホスピスに入院してからも崩しませんでした。かつて、若手胸部外科医としてアメリカで働いていた頃に出会ったボランティアの若い女の子に感銘を受け、いつかボランティアのいる病院にしたいとの思いが実現したホスピスで、お茶の時間や素敵な歌声や、毎日の花を楽しみながら、穏やかに過ごすことができました。食事のお茶は熱めが好き。お茶の時間はブラックコーヒー。これらは、ボランティアからの情報です。お花見会での私のおかめちゃん音頭を「なかなか上手でした。随分練習をしたのですか?」と褒めてもらいました。いっしょに撮った写真は、よい思い出です。



その中で、やはり家族だけに見せる不安で落ち着かない一面にも触れました。スタッフを信頼して、眠れない時に自分の気持ちを素直に表現してくれたことは、スタッフにとってかけがえのない励ましの言葉です。

強い精神力を持って、前向きな心で苦難に立ち向かって乗り越えてきたからこそ、あのよう
に穏やかな笑顔であったことが、闘病生活を通してわかりました。誰しもいつも笑顔でばかり
いることはできません。でも、誰しも必ず笑顔

になれるのです。それを、ホスピスでの闘病を通して最後のメッセージとして創設者川原啓美は残してくれました。生涯をかけて示してくれたものを大切に思い、忘れずに、私たちは歩み
続けていきます。

これからも 川原先生とともに・・・

ホスピス師長 成田昌代

16年前、愛知国際病院へ就職のための面接に訪れ、“God heals, We serve.”の文字に釘付けになり、ある医師の体験が壁一面に描かれ、その思いに、「ここで働かせてもらおう」と即決しました。その医師である川原先生の理念と行動は、看護師である私への共に進もうというメッセージだと感じました。その後先生の講演、講義をお手伝いさせていただく機会に恵まれました。さらに先生が最期をホスピスで迎えることになるだろうとお伺いしたときには、先生が建てられたホスピスで穏やかに過ごせたと感じてもらえる温かな環境を提供することが私の目標にもなりました。師長となり、先生が入院生活をなさる中で「病院をつくる時、こうあって欲しいと未来を描いていました。こうあって欲しいと思っていた優しいホスピスで今過ごすことができている。思っているとおり
にやって大丈夫」とお部屋に伺う度に励まして下さいました。ホスピスケアに取り組めてきた

のも、ホスピスチームの存在と、先生があたたかく見守ってくださっていたおかげだと思いま
す。

ある年の念頭の辞で、川原先生は、いつもど
おりの優しい口調で語られました。「ケアは、
かなしみの共同体ですから・・・」と死に直面
するスタッフへの祈りを伝えてくださいました。
「いつくしみ、いとおしむ」ケアを大事に
したいと思っていた私に、新たな気づきをいた
だいた年でした。そして、患者さん、ご家族の
かなしみを共に受けとめながら看護を提供する
ことで、穏やかさに繋がっていく時間になると
いいなあと思います。先生が分け与えて下さ
った時に感謝し、先生の足跡を繋げていくこと
ができるようチーム全体で力を合わせて、優
しい笑顔で勤めていくことができるよう頑
張っていきたいと思います。

ホスピスで大切な時間をお過ごしになった方のご家族より ご寄稿いただきました。

杉浦 淑子 様

母の本当の強さと優しさを知ったのは、母が病院で入院してからでした。

4月の桜が満開の頃、母が脳梗塞で倒れ入院することになりました。その時の病院の検査ですい臓癌が進行しており、癌の影響で脳梗塞を発症したという説明を受けました。そして、いきなりの余命宣告があり、三人姉妹で泣いたことを思い出すと今でもとても切なく、悲しい気持ちになります。

母は病気になる前から延命措置を行うことや抗がん剤を使用することを拒んでいたこともあり、本人の希望でホスピスにお世話になることになりました。転院した日、母は主治医の先生との面談があり、私も一緒に三人で話をしました。先生の優しい笑顔と物腰の柔らかい話し方、そして何よりもどのように過ごしていきたいか希望を何でも言うてみてください。と言われた母は先生の優しさが嬉しく、涙を流しながら色々なことを話していました。ホスピスでは毎日のようにボランティアの方々が絵手紙や手芸を教えてくださいたり、歌を歌ってくださったり、楽しいイベントがあります。看護師さんもマメに様子を見に来ていただき話し相手をしてくださったり、家族で過ごすような環境が整っていて本当に素晴らしいところだと感じました。毎回、母を見舞いに行くと私たち家族も先生をはじめ看護師さんやボランティアの方た

ちの優しさに触れ、いつも癒されてきました。そんなスタッフの方々の姿が私には天使のように見えました。私が今でも印象に残っているのは、母の病室を訪れたとき、母から優しい声でおかえり~と言われたことです。そんなとき、母はホスピスを本当の家のように感じているんだなーと実感し、安心することができました。家族が病気になったとき、本人が一番辛く大変ということ以外に家族も心身ともに大変だということを実感しました。

亡くなる数日前に母の誕生日会ができ、とても嬉しかったです。私たち三姉妹は今もこれからもずっと感謝の気持ちを忘れません。天国にいる母も同じ気持ちです。ホスピスの皆様、本当にありがとうございました。

